

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート（第8号）

図書館と居場所

未来の図書館 研究所

樹村房（発売）

2025

Library, A Place Where Everybody Fits In

The libraries of the future research, Inc. Annual Report (Vol.8)

The libraries of the future research, Inc.

Distributed by Jusonbo

Tokyo, 2025

はじめに

未来の図書館研究所調査・研究レポート第8号『図書館と居場所』は、2024年11月に弊社が開催したシンポジウムの記録を中心に編集したものである。

「居場所」は、近年、さまざまな施設のコンセプトや目指す姿を示すキーワードになった。多くの施設、福祉系の施設や子どもの集会施設、あるいはカフェなどにおいても「居場所」という言葉がその特徴、その存在意義を社会にアピールするものとして使われている。今まで「居場所」という言葉では形容されなかつたような施設においてもそうである。例えば、東京都町田市と神奈川県横浜市にまたがって位置する「子どもの国」は社会福祉法人子どもの国協会が運営する約100ヘクタールに及ぶ広大な公園であるが、ここでも2025年に開園60周年を迎えるにあたって、「これからも、明るい未来を作ることもたちの『居場所』でありたい」と述べている¹⁾。

このように、近年多くの施設が「居場所」を謳うようになったのはなぜだろうか。

居場所という言葉から想起されるのは「落ち着き」「自分らしさ」「信頼できる仲間・友人の存在」「人に咎められない安心できる環境」などだろう。この言葉が多用される背景には、人々の、日々多忙で、信頼でき頼れる人が周りにおらず、緊張を迫

られるストレスフルな生活がある。「居場所」が求められるのは、日々の生活のなかで人々の居場所がなくなっているからでもある。

このような、落ち着きと安心感がない生活は、われわれに何をもたらすだろうか。

「白熱教室」で著名なハーバード大学教授で哲学者のマイケル・サンデルは「道徳性とリベラルの理想」という小論の中で「不寛容が蔓延するのは、生活様式が混乱し、社会への帰属意識がゆらぎ、伝統が廃れるときだ（中略）。現代において、全体主義の衝動は、確固とした自己の信念から生じているわけではない。そうではなくバラバラにされ、居場所を失い、フラストレーションを抱えた自己の困惑から生じているのだ」²⁾と述べている。だとすると、この問題は、今日のネット上をはじめとした場面でのトゲトゲしい物言い、自分に都合のいい「正義」を声高に叫ぶ風潮、力で物事を推し進めようとする社会のありようと深いところで関連しているのかもしれない。居場所をつくろうという取組みは、私たちがどのような社会を目指すのかということにも関わっている。

シンポジウムでは、こども家庭庁の「こども家庭審議会こどもの居場所部会」の委員をされ「こどもの居場所づくりに関する指針」づくりにご尽力された文教大学の青山鉄兵氏、せんたいメディアテーク、武蔵野プレイスなど人々や子どもたちの活動拠点としての新しい施設づくりを行ってこられた株式会社マナビノタネの森田秀之氏に、居場所とは何か、居場所となる

ための条件や運営の考え方などについてお話を伺い議論を行った。「『ゆるゆる』が必要」「支援臭を無くすこと」など、きわめて実践的でかつ原理的なことについても議論がなされたと感じている。

また、「居場所」を考える企画として、居場所と施設づくりとの関係が深いことから、水戸市立西部図書館や小牧市中央図書館の設計を手掛けられた建築家の新居千秋氏に、図書館建築にかける思い、目指している方向性等を新たに書いていただいた。この論考の中で、新居氏は図書館づくりにおいて「居場所で楽しい空間」、「行きつけの場所」を目指していると述べられている。

併せて、2024年に弊社で行ったオープン・レクチャーにおける日本大学文理学部教授大場博幸氏の講演記録「公共図書館の目指す価値と蔵書構成の実際－蔵書分析が示すもの」及び弊社研究理事磯部ゆき江氏の「広域連携によってできること－人口減少と「圏域」電子図書館」を収載した。

大場氏の論考は、今まで公共図書館が目指してきた価値、すなわち「人々の要求」「資料の価値」「中立性や多様性」が実際の蔵書構成上どのように実現されているか、また図書館の新刊書の収集及び貸出が書籍の売上にどの程度影響しているか、をデータの分析によって解明したものである。

また、磯部氏の論考は、本シリーズ第7号に続くもので、単一自治体の枠を超えた近隣の自治体と共に電子書籍サービスを導入した取組みについて紹介し、その意義を述べたものである。

岡山県における二つの事例、津山圏域定住自立圏の事業「つやまエリアデジタルライブラリー」と高梁市・美咲町・吉備中央町の3市町による「おうちデジタルライブラリー」が取り上げられている。

この二つの論考は、いずれも今日の日本の公共図書館の姿、今後進むべき方向を考えるうえで貴重な論考であり、また、示唆に富むものである。多くの図書館員、関係の方々の眼に触れることを期待している。

今後とも本シリーズが充実した内容になっていけるよう、皆さまの忌憚のないご感想、ご意見をいただければ幸いである。皆さまのご支援、ご鞭撻を心からお願いする。

2025年5月

未来の図書館 研究所
所長 戸田 あきら

【注・参考文献】

- 1) 「子どもの国」 <https://www.kodomonokuni.org/>, (参照 2025-05-22) .
- 2) マイケル・サンデル 『公共哲学：政治における道徳を考える』
鬼澤忍訳、筑摩書房、2011, p.232-233.

目次

はじめに	3
■ 図書館と居場所	
シンポジウムテーマの趣旨	10
図書館が「居場所」となること／「居場所」のさ さまざまな視点／シンポジウムと講師について	11
講演「子ども・若者の居場所と図書館」	17
青山 鉄兵	17
1. はじめに	17
2. 子ども・若者の居場所への社会的関心の高まり 居場所への関心の大きな流れ／空気としての「居 場所」／「居場所」の意図的な提供の必要性と矛 盾／家庭・学校・地域の変容／領域横断的な子ど も・若者政策の推進	18
3. 子ども・若者にとっての居場所とは	27
居場所となるための条件／「居場所」の多様性／ ユニバーサル型とターゲット型／ターゲットニー ズを包含するユニバーサルな居場所	27
4. 居場所としての図書館のこれまで・これから 居場所としての図書館の実態／（結果としての） 居場所としての図書館の特徴／図書館が居場所に （も）なることの意味／居場所としての図書館に 向けた論点・課題	38
講演「居場所づくりの実践から」 … 森田 秀之	46
1. はじめに	46
コードマーク御代田／図書館と居場所	46

2. 「居場所としてのデザイン」実践紹介 1	52
① せんだいメディアテーク (1997-2001)	52
公開空地／オープンスクエア／メディアテーク の三つの憲章／自分たち事	
② 武蔵野プレイス (2007-2011)	55
あらゆるひとに来てもらわなければならない／ 暗騒音／B2 (ティーンズスタジオ)	
3. よい居場所の条件とは	59
4. “典型的な”図書館はよい居場所になれるのか？	61
5. 図書館がよい居場所になると何がいいのか	64
金魚の実験	
6. 「居場所としてのデザイン」の実践紹介 2	66
都城市立図書館	
7. まとめ	71
 ディスカッション	73
居場所づくりと公共図書館／居場所としての図書 館の評価／図書館員の専門性と他の専門職との連 携／多様性を図書館のなかにつくる／自由な発想 でやってしまう／おわりに／謝辞	
 ■ オンリーワンの居場所を目指し続けて	93
—私たちの図書館づくり	新居 千秋
1. 私と図書空間との出会い	93
2. One and only...Workshop・・・「なつかしい未来」 を見つける	99
3. 学習室・リーディングスペース	102
4. 水戸 「水道をひねっても文化は出でこない」	108
5. 小牧 1976 (ナインティ・セブンティ・シックス)	114
6. 家具を作る・選定する	120
7. 図書館の調査とヒアリング	125
8. 地域にたったひとつの建築をつくる	130

■ 公共図書館の目指す価値と蔵書構成の実際	134
—蔵書分析が示すもの	大場 博幸
1. 図書館所蔵をめぐる四つの論点	134
2. 雑誌と新聞：需要および他の要因	142
3. 教養新書：特定シリーズの優位	147
4. 統計分析の基礎	149
5. 一般書籍：主題の多様性	155
6. 意見対立のある主題：中立性	159
7. 新刊書籍市場との関係	162
8. 結論	170
■ 広域連携によってできること	181
—人口減少と「圏域」電子図書館	機部 ゆき江
1. はじめに	181
2. 人口減少と図書館数・図書館サービスの推移	182
3. 公共図書館サービスと広域連携による電子書籍サービス	185
4. つやまエリアデジタルライブラリー	187
5. おうちデジタルライブラリー	193
6. 広域連携の活動によってできること	197
7. おわりに	200
あとがき	204
著者略歴	205

図書館と居場所

開催日 2024年11月15日（金）

会場 出版クラブホール

会場およびZoomによるオンライン開催

講演者・パネリスト 青山 鉄兵

森田 秀之

コーディネーター 戸田 あきら

主催 株式会社 未来の図書館 研究所

シンポジウムテーマの趣旨

戸田 あきら (未来の図書館 研究所)

図書館が「居場所」となること

今回のシンポジウムのテーマは「図書館と居場所」です。このテーマを選んだ直接のきっかけは、私どもで昨年度いくつかの自治体の図書館計画づくりのお手伝いをしたのですが、その際の計画策定委員会（地域の住民や地域団体の方を含む）で図書館が「居場所」になってほしいという発言が多く出されたことがあります。それらの発言の多くは、子どもの居場所になってほしい、特に学校に行けない子どもたちが来られるような、そういう場所になれないかという要望でした。

今日、学校に行きづらい子ども、不登校の子どもの数は増えており、文部科学省の調べでは令和5年度の小・中学校の不登校者数は34万6千人と言われています。この学校に行きづらい子どもたちが家から出られずひきこもりになってしまっていいのか、学校には行けなくともまずは家を出てどこかに行ける、落ち着いて時間を過ごす場所がある、図書館がそういう場所になってほしい、というお話をしました。

図書館の側からも、学校に行きづらい子どもたちに居場所として図書館を使ってほしいというメッセージが出されております。最も有名なものは2015年8月に鎌倉市図書館から発信されたTwitterの呼びかけです。これは「もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へい

らっしゃい」と呼びかけたものでした。このメッセージはマスコミでも大きく報道され、公共図書館が資料・情報の提供だけではなく、こういう役割を果たせるのだということを社会に知らしめるものとなりました。図書館界の中では、人々の居場所としての図書館の役割に注目する議論¹⁾や居場所となることを目指した図書館の取組み²⁾は2000年ごろから始まっていましたが、「居場所としての図書館」という議論を一举に社会全体のものにするという効果が、この鎌倉市図書館のメッセージにありました。

実際に社会からのそういう期待に対応して、居心地の良い場所、居場所となることを目標にする、あるいは目標の一部にする図書館は増えております。例えば文科省の「図書館実践事例集～地域の要望や社会の要請に応えるために～」では、宮崎県えびの市民図書館、石川県珠洲市民図書館などが、居場所となることをテーマとして掲げています。近年では、愛知県豊橋市まちなか図書館や宮崎県都城市立図書館、いずれも人々に多様な使い方をされており社会的に評判が高い図書館ですが、居場所としての役割、機能を図書館のウェブサイトやウェブメディアなどでアピールされています³⁾。今日「居場所としての図書館」というのは、一つの社会的関心事であり、図書館にとっても市民にとっての図書館の有益性を訴える一つのポイントになってきていると思います。

そこで、居場所という問題、居場所づくりという課題について今まで取り組んでこられ、さまざまな実践経験や知見をお持ちのお二人の先生にお越しいただき、居場所とは何か、居場所

になるためには何が必要かを伺い、そして、図書館が居場所となるとは一体どういうことなのか、その意味について、改めて考えてみたいと思っております。これが、このシンポジウムの趣旨、目的です。

「居場所」のさまざまな視点

ところで、この「居場所」という言葉の意味ですが、その内容としては、多様な対象、機能が考えられ、論者や施設によってそのどこを意識するのか、どこを強調するのかは異なっておられます。辛い思いをしている子どもたちが安心して時間を過ごせる場所という意味で語られることもあれば、子どもだけではなく高齢者やマイノリティなど社会から疎外されがちな人がちゃんとケアされ、居心地よく過ごせる場所という意味合いで使われることもある。どちらかと言うと「逃避できる場所」というニュアンスで使われる場合が多いのですが、より能動的・活動的な「居場所」が語られることもあります。学校や会社、家庭ではできない、自分たちの好きなことを仲間たちと一緒にやる場所というような意味合いで語られることもあります⁴⁾。

さらに、居場所という言葉と関連させて使われることが多い「サードプレイス」という言葉ですが、この言葉は、第一の家、第二の職場や学校で阻害されている人たちのための場所を意味するものではありません。『サードプレイス』⁵⁾の著者レイ・オルデンバーグは、サードプレイスには「ストレス源からの逃避や息抜きをはるかに超えた意味」がある、「訪れる客たちの差別をなくして社会的平等の状態にする役目を果た」し、人々

が交流し会話が活発に行われる、「活気のあるインフォーマルな公共生活に不可欠」なものだと述べています（第2章 p.64-97）。

このように、「居場所」の意味するものは多様であり、「居場所としての図書館」を議論する場合、どのような意味で「居場所」という言葉を使うかは大きな問題ではありますが、今日のシンポジウムではその意味をあまり厳密に限定せず議論していきたいと思っています。というのは、このテーマは、図書館にとって新しいテーマであり、図書館界としては取り組み始めたばかりという状況です。人々がそこに集い、時間を過ごし、交流し、さまざまな活動をするという、これから図書館の一つのあり方を考えるうえで、最初からその行き先を限定せず、少し広い意味で捉え議論したほうが発展性はあるだろう。したがって、居場所とは何かというところで限定的に定義するのではなく、さまざまな視点から議論していきたいと思っています。

シンポジウムと講師について

それでは、これからシンポジウムの中身に入っていきます。これらの問題について取り組んでこられたお二人の先生にご講演をいただき、休憩を取った後、会場あるいはオンラインから皆さんのご意見やご質問を受けて、ディスカッションするという流れで進めていきたいと思います。

最初に文教大学人間科学部准教授の青山鉄兵先生に、主に子どもの居場所という観点からお話を伺います。青山先生は社会教育分野を中心に、子ども・若者の体験活動や居場所の研究、

実践、政策に関わられ、こども家庭庁こども家庭審議会こどもの居場所部会の委員をされています。2023年、こども家庭庁で「子どもの居場所づくりに関する指針」が策定されましたが、先生はその基となる調査研究報告書の作成メンバーをされており、今日はそこで得られたお話を伺えるのではないかと思っています。

次に、森田秀之様からお話を伺います。講演のテーマは「居場所づくりの実践から」です。森田様は三菱総合研究所を経て、2007年長野県御代田町に移住され、株式会社マナビノタネを設立されました。全国で図書館をはじめとした文化、学びの場づくりを行っていて、都城市立図書館の管理運営事業共同体の代表をお務めになっておられます。また、御代田ではお米や薪を作り、自然と共に生きていくための地域自治の拠点づくりの実践をされています。

それでは、両先生、よろしくお願ひいたします。

【注・参考文献】

- 1) 近藤周子「癒しと快復の場としての図書館」『みんなの図書館』264号、1999、p.11-14。
根本彰「「場所としての図書館」をめぐる議論」『カレントアウェネス』No.286、2005、p.21-25. <https://current.ndl.go.jp/ca1580>, (参照 2025-02-24) .
- 2) 次の文献に人々の居場所となっている滋賀県の町や市の図書館

の事例が紹介されている。

虫賀宗博「私の居場所「自殺したくなったら、図書館に行こう」：

いのちを育てる図書館員の群像」『世界』742号, 2005, p.214-225.

- 3) 豊橋市まちなか図書館「施設案内」<https://www.library.toyohashi.aichi.jp/facility/machinaka/facility/>, (参照 2025-02-24) .
都城市立図書館井上館長のインタビュー記事。未来定番研究所「市民のあたらしい「居場所」をつくる。〈都城市立図書館〉館長と考える、地域づくりのこれから。」2021.03.27, <https://fin.mirai-teiban.jp/miyakonojotosyokan/>, (参照 2025-02-24) .
- 4) 共同通信社取材班『わたしの居場所』現代人文社, 2021, 216p.にはさまざまな「居場所」がレポートされている。
- 5) レイ・オルデンバーグ『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳, みすず書房, 2013, 528p.

あとがき

公共図書館のあり方の議論のなかに「居場所」が入ってきたのはいつからだろうか。青山氏によれば、「居場所」という言葉が「心のよりどころ」という意味で使われるようになったのは1980年代、教育・福祉分野で「居場所づくり」に関わる施策が展開されていくようになったのは2000年代という。森田氏は、居場所づくりとはその場所を人の内面に合わせていくことで、キーワードは「ゆるゆる」。「緩きで許せる」が大事だと説く。

今回のシンポジウムのテーマ「図書館と居場所」は多くの方の関心を呼び、さまざまな立場の方の参加を得た。両氏のお話とディスカッションによって、多様だが曖昧だったそれぞれの「居場所」のイメージが明確になったり、方向づけられたり、勇気づけられたという感想がアンケートには寄せられた。

シンポジウムに加え、居場所としての公共空間をつくり続けている建築家の新居氏に、これまでのご経験や手法を特別にご寄稿いただいたので、これもぜひお読みいただきたい。

大場氏のご講演は氏の長年のご研究の貴重な成果である。公共図書館の蔵書に関する主要な四つの論点について検討し、根拠のあるデータと統計学の手法を用いて、きわめて説得力のある結論を導いている。

上記の執筆者に感謝するとともに、発売にご尽力いただいた樹村房の大塚栄一氏に心からお礼を申し上げる。

未来の図書館 研究所
磯部 ゆき江

著者略歴

青山 鉄兵（あおやま・てっぺい）

文教大学人間科学部 准教授

1980年東京都生まれ。社会教育分野を中心に、子ども・若者の体験活動や居場所の研究・実践・政策に関わる。現在、文部科学省生涯学習調査官、国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター客員研究員、中央教育審議会生涯学習分科会社会教育の在り方に関する特別部会委員、子ども家庭審議会子どもの居場所部会委員等を兼務。(公財)東京YMCA評議員・東京YMCA長期キャンプ「野尻学荘」副荘長

森田 秀之（もりた・ひでゆき）

株式会社マナビノタネ 代表取締役／株式会社コードマーク御代田・株式会社コードマーク都城 代表取締役

1966年東京都生まれ。三菱総合研究所を経て、株式会社マナビノタネ設立。全国で図書館をはじめ文化・学びの場づくりを行う。開館に携わった施設は、せんだいメディアテーク、川口市立中央図書館、武蔵野プレイス、島根県立古代出雲歴史博物館など。都城市立図書館では管理運営事業共同体代表。2007年長野県御代田町に移住、自然と共に生きていくための地域住民の拠点をコードマーク御代田で実践中

新居 千秋（あらい・ちあき）

建築家、株式会社新居千秋都市建築設計 代表取締役

1948年島根県生まれ。武蔵工業大学（現 東京都市大学）工学部建築学科卒業後、ペンシルベニア大学大学院芸術学部建築学科修了。ルイス I. カーン建築事務所、ロンドン市チームズミード都市計画特別局勤務を経て、1980年に新居千秋都市建築設計設立。第18回吉田五十八賞（水戸市立西部図書館）、日本建築学会賞作品賞（黒部市コラーレ）、

日本建築学会賞業績賞（横浜赤レンガ倉庫）、村野藤吾賞（新潟市秋葉区文化会館）など 81 賞を受賞

大場 博幸（おおば・ひろゆき）

日本大学文理学部 教授

1973 年愛知県生まれ。2002 年慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程図書館・情報学専攻単位取得満期退学。2008 年常葉学園短期大学講師（図書課長兼任）、2013 年文教大学文学部准教授を経て、2018 年より日本大学文理学部准教授、2021 年より教授。2023 年 10 月から 2024 年 3 月に開催された「書店・図書館等関係者における対話の場」の座長を務めた。主著に『日本の公立図書館の所蔵』（樹村房）

磯部 ゆき江（いそべ・ゆきえ）

未来の図書館研究所

日本図書館協会勤務を経て、未来の図書館研究所。共著に『図書館員の未来カリキュラム』（青弓社）、『図書館とコミュニティアセット』『図書館と知識社会』（未来の図書館研究所）など

戸田 あきら（とだ・あきら）

未来の図書館研究所

世田谷区立図書館、文教大学図書館を経て、未来の図書館研究所。共著に『図書館の質を高める』（丸善出版）、『公共図書館の自己評価入門』（日本図書館協会）など

図書館と居場所

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート（第8号）

ISSN 2433-2151

2025年6月30日 第1版1刷発行

編集 株式会社 未来の図書館 研究所

発行 株式会社 未来の図書館 研究所

113-0033 東京都文京区本郷 4-9-25 2階

TEL 03-6673-7287 FAX 03-6772-4395

<https://www.miraitosyokan.jp/>

発売 株式会社 樹村房

112-0002 東京都文京区小石川 5-11-7

TEL 03-3868-7321 FAX 03-6801-5202

<https://www.jusonbo.co.jp/>

印刷 株式会社 丸井工文社

本書の無断転載を禁じます。

Printed in Japan

ISBN978-4-88367-411-4 C3300